様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０７０９
研究課題名（和文）　タイタ語のコーパスに関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）　A Study of the Corpus of *Kidawida* in Southeast Kenya

研究代表者
坂本　邦彦（SAKAMOTO KUNIHIKO）
尚美学園大学・総合政策学部・教授
研究者番号：２０２１５６４３

研究成果の概要（和文）：
文化人類学的視点からタイタ語のコーパスの動的側面を明らかにすることが本研究の目的である。そのために、次の 4 種類の言語データを音声言語による発話記録として収録した。すなわち、a）タイタ語の基礎語彙 2000、b）タイタ語の文法、c）拙著収録「体験された呪術」（原文はタイタ語）、d）小学生用タイタ語の教科書である。発話記録のデジタル化をおこなえたことは、彼らの思考体系を反映させた記録方法の中に、言語を記録する意味があると考えられることから、危機言語の記録方法の一形態を提示できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to analyze the corpus of *Kidawida* in anthropological perspective. The following is the recording of patterns of discourse: a)2000 *Kidawida* basic vocabularies, b)*Kidawida* grammar, c)narrative magic in Taita, d)*Kidawida* textbook in primary school. These results will be basic research items to analyze the extinction of languages in many parts of the world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学　・　文化人類学・民俗学
キーワード：アフリカ・タイタ・言語・文化人類学

１．研究開始当初の背景

タイタ語に関する初期の研究としては、1890 年代に英国聖公会宣教協会の派遣によるアルフレッド・レイがまと

めたものが残っている（Wray, J.A. *An Elementary Introduction to the Taita Language*. Society for Promoting Christian Knowledge. London. 1894.）。これは、アフリカの個別言語の記述としては完成度の高いものであるが、ここで取り上げられているのはおもにサガラ方言であり、タイタ人の多くが使っているダヴィダ語ではなかった。タイタ語は、広域で通用するダヴィダ語のほかにサガラ方言とカシガウ方言があるが、タイタ語の標準形といえるダヴィダ語に関するまとまった研究はこれまでおこなわれてこなかった。筆者は、レイの著書をタイタ人の調査協力者と共に読み合わせをおこなったところ、1世紀が経過していることと、サガラ方言の記述であることから、現在使われているダヴィダ語とは多くの点で異なることが明らかになった。その後、20 世紀初頭にテイト Tate, H.R. による基礎語彙の収集がおこなわれたが、それ以降は、国外の研究においては、プリンズ Prins, J.、ハリス Harris, G.、ムカンギ Mkangi、ムワンドエ Mwandoe 等をはじめとするタイタの文化社会に関する研究はおこなわれてきたが、特にタイタ語を詳細に取り上げた研究は見られない。

また、国内の研究においては、タイタ社会を対象とした研究は筆者以外におこなっている研究者はいないが、そうしたなかにあって、平成 12 年度に東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所編『アジア･アフリカ言語調査票』にもとづいて採録した語をまとめて基礎語彙集として作成したものを公表するとともに、平成 13 年度～15 年度科学研究費補助金基盤研究（C）『文化人類学的視点にもとづくタイタ語辞典編纂に関する研究』においてタイタ語の語彙を中心とする研究をおこなった。さらに平成 16 年度～18 年度科学研究費補助金基盤研究（C）『タイタ語の語彙と文法構造に関する文化人類学的研究』において、これまでのタイタ社会に関する文化人類学的研究をさらに深めていくために、タイタ語の語彙に関する研究に続いて、文法構造に関する研究をおこなってきた。本研究は、その継続研究としてタイタ語の発話を記録し、これまでの研究と合わせて、その成果を現地社会に還元していくことになる。

２．研究の目的

ケニア東南部の山地農耕民タイタ人の世界に関する文化人類学的研究の一環として、デジタルメディアを介した発話記録の収集とその分析を通して、文化人類学的視点からタイタ語のコーパスの動的側面を明らかにすることが本研究の目的である。これは、これまでおこなってきたタイタ語の語彙や文法などの文字化され、記述された言語データに関する研究の次の段階として位置づけられるものである。

文化人類学の研究において研究対象とする民族の言語を理解することは、彼らの文化社会の理解に不可欠である。『エスノローグ第 16 版』（Gordon, R.G., *Ethnologue: languages of the world*. Dallas. 2009.）によると、現在、世界には 6909 の言語があるとされ、発話の記録、地名、歴史的文献など、何らかのコーパスとして形になっているものは 60%ほどである（Crystal, D., *Language Death*. Cambridge University

Press. 2000.）といわれる。ユネスコは、1993年11月の総会において「危機言語プロジェクト」を採択し、その経過報告のなかで「正確な規模はまだ不明だが、世界の多くの地域で言語の消滅が急速に進行しているのは確かであり、言語記述が一層必要になった」と述べている。言語のコーパスの中で、語彙や文法は第一義的な重要性を持つが、あわせて、その言語を使う人々の世界観が反映されているような発話の記録、たとえば、エチオピア南部のオモ系牧畜民ハマル Hamar の調査記録を収めたDVD（Lydall, J. & Strecker, K. *Duka's Dilemma: a visit to Hamar*, Southern Ethiopia. Watertown, MA. 2001.）などは、文化としての言語を捉える上で大きな意味を持つ。言語データの収集にとどまらず、彼らの思考体系を反映させた記録方法の中に、言語を記録する意味があると考えられ、そして、そこでは、文化人類学からのアプローチが必要になってくる。

本研究では、このような視点から、これまでおこなってきたタイタ語の語彙、文法構造の研究に次ぐものとして発話記録に関する研究をおこない、デジタルメディアを用いて記録に残すことにより、タイタ語のコーパスの全体像を明らかにしようとするものである。これは、現在、各方面で行なわれている危機言語の記録方法としても有効であると考えられる。

３．研究の方法

タイタ語辞典編纂に関する研究、タイタ語の語彙と文法構造に関する研究を通じて、単なる一言語の構造の研究ではなく、文化人類学の研究成果を豊富に取り込むことにより、少数民族の言語記述の方法に一つの方向性を提示してきた。それらは、言わば静的な言語記述であり、言語のコーパスの中心をなすものであるが、語彙、文法構造に次ぐものとして、発話の記録をタイタ語のコーパスの中に位置づけることにより、動的な生きた言語記述が可能になる。本研究は、その点においてこれまでの研究の継続であると同時に、あらたな視点の導入により言語記述の質を高めることになる。

本研究の目的は、文化人類学的視点からタイタ語のコーパスの動的側面を明らかにすることである。そのために、次の4種類の言語データを音声言語による発話記録として収録した。すなわち、a）タイタ語の基礎語彙 2000、b）タイタ語の文法、c）拙著収録「体験された呪術」（原文はタイタ語）、d）小学生用タイタ語の教科書である。a）は、タイタ語、スワヒリ語、英語、日本語を対照させているが、タイタ語とスワヒリ語の部分を収録した。b）は英語論文であるが、タイタ語の例文及び単語の部分を収録した。c）は、日本語論文であるが、データ収集時の原文のタイタ語で収録した。d）はタイタの小学校で使われていたタイタ語の教科書を収録した。これらを通じて、これまでの研究においてタイタ語の語彙と文法を明らかにしたことに加え、本研究においてデジタルメディアを介して実際に語られている場面の発話記録を採ることにより、生活世界におけるタイタ語のコーパスの全体像をより一層明らかにすることができたと考えられる。

４．研究成果

(1)平成 19 年度においては、10 月か

ら科研費による研究がスタートしたことにより、タイタ語の 2000 の基礎語彙に関する研究に先立ち、文法構造に関する研究で採録した語彙及び各例文を、音声言語の形で収録することを中心に進めた。文法に関する事項については、表記法・名詞・形容詞・数詞・代名詞・動詞・副詞・前置詞・接続詞・関係詞の順で収録した。これらの収録は、現地調査協力者とともにおこなった。

(2)平成 20 年度では、前半で、基礎語彙と例文に関する収録をおこなった。後半で、拙著(坂本、2001)でとりあげた「体験された呪術」(原文はタイタ語)を音声言語の形で収録した。これらに関しては、ネイティヴスピーカーのチェックを受けるために、夏と春に短期間現地に赴き、対面調査を通じてデータの充実に努めた。語彙の収録に時間を要してしまったが、これでネイティヴスピーカーによる基礎語彙の発音に関して記録をとることができた。以上により、前年度実施した文法に関する収録に加え、基礎語彙に関する収録が完了した。

(3)平成 21 年度では、既に採録が終わっている語彙、文法、文字化された資料との対応関係に齟齬が生じないように再チェックを行い、その結果をタイタ人の調査協力者とともに最終的な検討をおこなった。また、ケニア国独立以前に小学校で使用されていたタイタ語のテキストを入手し、音声言語による発話記録として収録するとともに、スワヒリ語による対照訳を付した。

以上、平成 13 年度～18 年度にかけて科学研究費補助金によりおこなってきた語彙と文法構造に関する研究に、新たに 3 ヵ年にわたる研究を継続しておこなうことにより、タイタ語のコーパスの全体を視野に入れて研究することができた。特に、発話記録のデジタル化をおこなえたことは、彼らの思考体系を反映させた記録方法の中に、言語を記録する意味があると考えられることから、危機言語の記録方法としての一つの可能性を提示できたのではないかと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①坂本邦彦　「タイタ語とスワヒリ語の比較対照に関するデータ」『尚美学園大学総合政策論集』第 19 号　2009 年　55 頁～66 頁　査読有

②坂本邦彦　An Introduction to *Kidawida*: The Language of the Taita in south-east Kenya. Volume Ⅲ：Verbs, Adverbs, Prepositions and Conjunctions. *The Bulletin of Policy and Management Studies*, volume 14-16,　Shobi University, pp.1－11, 2008-9、査読有.

〔学会発表〕（計　件）

〔図書〕（計　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
坂本　邦彦　(KUNIHIKO SAKAMOTO)
尚美学園大学・総合政策学部・教授
研究者番号：２０２１５６４３

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：